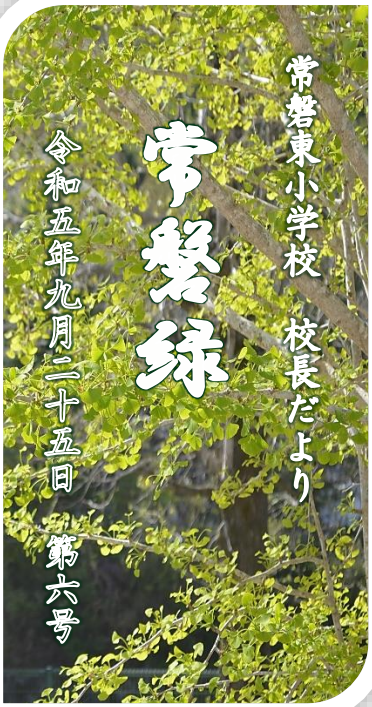

葡萄熟す無尽に巡る蔓（つる）の先

葡萄棚の木漏れ日の下、子供も大人も笑顔で葡萄をほおばり、会話を楽しんでいる。「『ハニーシードレス』って、メロンの味した？」「これは『スチューベン』。今度は種のない種類を採ってこよう」「もう八房目」「今日は、四種類全部食べるんだ」

九月十五日、「ふれあい遠足」の葡萄狩りで背が届かない子は、家族に抱き上げてもらう、踏み台を支えてもらうなどして、狙った房を自分で収穫した。また、近くの上級生や先生、友達の家族や地域の方に採ってもらっていた。テーブルで一房を分け合う姿もあった。そして、お腹が満たされると、就学前の弟や妹を囲んであやしたり、近くにいた者同士で輪投げゲームを始めたりもした。子供たちの明るい声が響く中、地域の方もくつろいでおられた。

そんな中、一年生のSさんが私の前にやって来た。「敬老会にいたおばあちゃんがいる」と。一週間前の敬老会で、Sさんは過去にトランポリンを譲ってくれたおばあちゃんを見つけたのだった。

それを遠足の前日に聞いた私は、「親切な人だね。今度会ったら教えてね」と返答した。その何気ない会話を覚えていて、Sさんは約束を果たしに来たのだった。その純真さに感激し、早速その方のところに二人で向かうと、その方も目を大きく見開き、「あなたが○○さん家の…」と、Sさんを愛おしそうに見つめるのだった。

「ふれあい遠足」は秋晴れを通り越し、三十度を超える猛暑となった。往路から日差しが痛い。しかし、安土公民館を越えた森の木陰に給水所が設置され、学区社教委員会・福祉委員会の方が待ち構えていてくれた。歩いてきた保護者の方も、お茶が皆にいきわたるように進んで配ってくれた。氷で冷やされたお茶や手洗いの水に、周りの人々の心遣いに、体も心も癒される。復路は救急車両がさらにまめに巡回し、辛そうな人を熱中症の危険から救ってくれた。おかげで安心して会話を楽しみながら遠足を続けることができた。無事帰着した子供からは、「全然疲れてないよ」「去年より楽」との声が漏れ聞こえた。社教委員会、福祉委員会の皆様の入念な計画と心尽くしの運営に、心から感謝申し上げたい。

「こんな素敵な企画をしてもらえるなんて、本当によい学区ですよね。幸せです」これは、道中を共にした保護者の言葉である。地域で子供を育てると言うが、まさに、それが具現化された「ふれあい遠足」。子供同士が学年を超えて和気あいあいと関われるのも、保護者や地域の人々のネットワークの確かさに支えられた学区の風土と言える。一本の幹が枝を広く縦横に張り巡らせ、たわわに実る葡萄の豊潤さが、常磐東学区で腕を組んで生きる子供たちの幸せな姿と重なって見えた。